

検証

崩拓銀

<7> 10.10.13

種の決済資金に加え、積み金の資金も確保する必要に迫られていた。

結局、拓銀は初めて準備預金を積み、過剰金という、罰金を課せられる不名誉な結果となった。

「拓銀の資金繰りは三年ほど前から厳しさを増していた」

同行のある役員はこう明かす。不良債権処理に手間取っていたうえ、過剰貸し出しを改善できず、預金流出が徐々に増えていたためだ。資金が必要になる決算期や年末など

退場

その日は拓銀の東京資金証券部にとって、長く沈うつな一日だった。昨年十一月十四日、金曜日、金融市場からの資金調達はいつも午前中、午後に入っても難航していた。

市場が終わるまでまた小一時間あった。拓銀は粘るつもりだったが、ほとんど資金調達をあきらめた。「いいで無理をして市場の信頼を失う方が痛い」との判断からだった。折しも、この日は日銀が金融機関に預金の一定割合を強制的に預け入れさせる準備預金の積みの最終日だった。各

窓の外が暗くなり始めた午後四時で、日銀の中堅幹部から電話が入った。日銀「週末のこんな時間になってまたやっているんですか。市場にますます危ないと思われるよ」

拓銀「それはいつても...」



第一部 「迷走の果て」

銀行会館

東京・丸の内にある銀行協会連合会の本館。多くの重要会議が開かれ、拓銀も参加した。

銀行会館（短期金融市場）に資金を出す金融機関は、取り手の信用度に応じて貸し出し上限を定めた与信枠を設定している。その与信枠を絞る動きが、このころ、拓銀に与信枠を持つ大手金融機関が合併交渉の進み具合を聞いてきた。

大手 「合併交渉はもうなっていますか」
拓銀 「かなり厳しい状況です」
大手 「いいですか。延期を提供していた。それが、なぜかこの日は示し合わされたよ」

信用に影、先細る資金

資金繰りが一段と逼迫し、期が迫るうわさが広がり始めた。合併の駆け引きにうつつを抜かしている場合じゃないか、それともどこかで意図的

破たんが近づいていた。山一のは行き詰まりとの判断を固めた。肩書は当時「拓銀問題取材班」

「そして運命の十四日。前日までは拓銀の主要幹事の山一証券など複数の金融機関が、市場を通じて拓銀に資金を提供していた。それが、金額の約三百七十億円に対し、約百四十億円足りなかった。過剰金は三百数十万円。拓銀はこれを支払え、何とかなると思っていたが、金融当局

な力が働いたのか。市場関係者によると、拓銀は当時、市場から日々三千億円近い資金を調達していたが、この日の調達額は約二千八百億円。前日まで毎日四百億円前後を調達していた無担保コールは、わずか六十一億円に終わった。

調達した資金は各種決済に順次充て、資金ショートは何かを免れた。拓銀はその夜、札幌と東京でテレビ電話会議を開いた。週明け以降の資金繰りのめんどろとあえすづけ、最後に永田修専務が「来週も資金取りに頑張ろう」と概（げき）を飛ばした。だが、決済資金を優先したため、準備預金は積み目の目標額の約三百七十億円に対し、約百四十億円足りなかった。過剰金は三百数十万円。拓銀はこれを支払え、何とかなると思っていたが、金融当局